副葬されたガラス玉

～上保本郷遺跡で確認した石室出土遺物～

調査課　古屋　寿彦

考古学コラム「きずな」NO.15
平成 29 年２月 20 日
岐阜県文化財保護センター

＜はじめに＞

「あっ。」

石室内を掘削中の作業員さんから発せられた一言。指差す先には、わずかに光る、緑色のガラス玉。

船来山の南麓に広がる平地に突如として現れた古墳。そしてその石室内から出土した、直径５ミリに満たない小さなガラス玉。よくよく観察すると、確かに中央には、糸を通すための穴。

「こんなに小さなガラス玉、よく掘削中に見つけることができたものだ。」と、作業員さんの仕事ぶりに感動すると同時に、「こんなに小さなガラス玉、よく作ったものだ。」と、当時の人々の営みについて心を動かされました。

＜ガラス玉を特徴づける要素とは＞

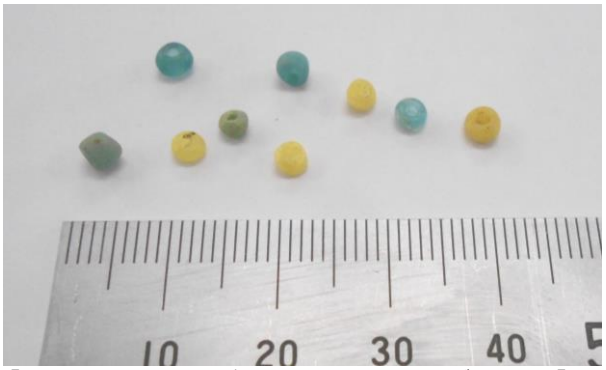
今回、本巣市内に所在する上保本郷遺跡において、石室を２基、確認しました。いずれも平地に築かれたもので、出土遺物や石室の造りから、７世紀前半から中頃のものであると考えられます。ガラス玉はそのうちの１基から、掘削中に２点、石室内の土をフルイにかけて 16 点、出土しました。

このガラス玉が副葬されたのは古墳時代後期、今から 1,400 年ほど前になります。おそらく、埋葬された人のための装飾品として、一緒に埋められたものでしょう。しかしそんな昔に、当時の人々はどのようにしてこのような小さなものを作ったのでしょう。よく観察してみると、大きさはどれも同じようなサイズなのですが、色が違ったり、形が違ったりと、それぞれに特徴があることが分かります。どうもその特徴には、ガラスの成分と、ガラス玉の作り方が大きく関わっているようです。

もともとガラス玉は、弥生時代に中国から日本に伝わってきました。古墳時代には、それが全国に流通するようになります。そして、爆発的にガラス玉が出土する遺跡が多くなります。また、いろいろな色のガラス玉が見られるようになります。さらに７世紀には、日本国内においても、ガラス原料からのガラス生産が始まるようになります。そういった過程の中で、多様な種類のガラスを使用したり、着色したりするようになったようです。

当時のガラス玉の製作技法としては、大きく３つが考えられています。

一つ目は引き伸ばし（管切り）法と呼ばれるもので、熱したガラスをストローのように引き延ばし、それを切断していく方法です。二つ目は巻き付け法と呼ばれるもので、細い心棒に溶かしたガラスを巻き付け、一つ一つ玉状のものを作っていく方法です。そして三つ目が、鋳型法です。小玉大の凹みを多数あけた粘土板で作った鋳型にガラス粒を入れ、それを熱してガラス玉を作る方法です。



【写真　上保本郷遺跡から出土したガラス玉】

＜上保本郷遺跡出土のガラス玉の特徴とは＞

写真は、上保本郷遺跡で今回見つかったガラス玉です。完全な形のものは全部で９点ありました。数としては非常に少ないのですが、内訳をみると、空色が３点、緑色が２点、黄色が４点、とバラエティーに富んでいます。空色の玉と黄色の玉は透明で全体に丸みを帯び、緑色の玉は不透明で上下の端面に平坦面がみられます。明らかに空色、黄色のガラス玉と、緑色のガラス玉とは様相が違います。それはガラスの成分の違いなのでしょうか、それとも製作技法の違いなのでしょうか。

ガラス玉の表面をよく見てみると、どれも不純物が混じった様子は見られません。鋳型法で製作されたガラス玉は、不規則な色ムラや溶けきらなかったガラス片による突起物などが見られるため、今回のガラス玉はそれには当てはまらないようです。引き伸ばし（管切り）法で製作されたガラス玉は、切断後、再度加熱し、整形するため、丸みを帯びた端面になるようです。また、船来山古墳群で出土したガラス玉は、観察の結果、多くのものが引き伸ばし（管切り）法で製作されたことが分かっています。今回出土の空色や黄色のガラス玉もおそらく、同じ技法によるものではないかと考えられます。ただ、緑色の玉についてはよく分からない、といった状況です。

＜おわりに＞

現段階では、分かっている事実から、あれこれと想像を膨らませているところです。今後、どのような成分のガラスで製作されたものなのか、どのような技法で製作されたものなのかを探っていく予定です。直径５ミリにも満たない小さなガラス玉から、どんな情報が得られるか、とても楽しみです。

＜参考文献＞

本巣市教育委員会 1999『船来山古墳群』